

湘南日独協会 会報

Der Wind (風)

湘南日独協会会報(Der Wind)

VOL. 10. NO. 3. 通巻57. 発行 2008. 5. 25.

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局：〒251-0025 藤沢市鵠沼石上1-1-1

江ノ電第2ビル7F

TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

6月の会員懇話会

映画「ふたりのロッセ」鑑賞と懇談

ケストナーの世界的名作「ふたりのロッセ」完全映画化！

日時 6月28日(土)午後6時～

会場 湘南アカデミア7Fサロン

会費 500円(当日払い)



● あらすじ 両親の離婚で別々に育てられたふたごは、お互いの存在を知らないまま成長し、サマースクールで偶然出会います。広告会社で忙しく働く母親を助け、家事をこなすおしとやかなルイズと、ミュージカル劇団の作曲家の父親と暮らす、おてんば“チャーリー”ことシャルロッテ。自分たちがふたごだと知ったふたりは、両親を仲直りしようと、“入れ替わり作戦”を計画します。

性格も環境も正反対の相手になりすまし、それぞれの家に帰ったふたりだったのですが・・・。

ドイツ青年のホームステイをお願いします！

①Markus Rüsch 氏(男性 19才 学生)

7月9日朝 成田着

特記事項：日本大好き。習字をやる。

日本語は初歩。

②Kathrin Hasenburger 氏(女性 26才)

期間 9月17日～12月17日

仕事 慶應義塾大学 日吉 でドイツ語を教える。

希望事項 家族かワンルーム住居。

●お心当たりの方は・・・

織田会長 … TEL 0466-27-3098

又は事務局 吉田まで。 … TEL 0466-26-3028

湘南日独協会 2008 年度活動予定

当協会創立 10 周年

■ 6月会員懇話会

テーマ 映画「ふたりのロッセ」を語る会

エーリッヒ・ケストナーの名作の完全映画化。時代は現代に翻案されている。

日時 6月28日(土) 午後6時～8時

会場 湘南アカデミアサロン(江ノ電第2ビル7階)

■第58回例会 講演会「4-5月ドイツ旅行報告会」

講師 織田正雄・西山只壬・樋口由美子の各氏

日時 7月27日(日) 午後1時30分～3時30分

会場 湘南アカデミアサロン(江ノ電第2ビル7階)

■第59回例会

湘南オクトーバーフェスト

日時 9月7日(日) 午後6時～9時

会場 藤沢市民会館第一展示ホール

■第60回例会

当協会創立 10 周年記念祝賀会

ワイマールからの来日一行20名も参加予定

コンサートと立食パーティ

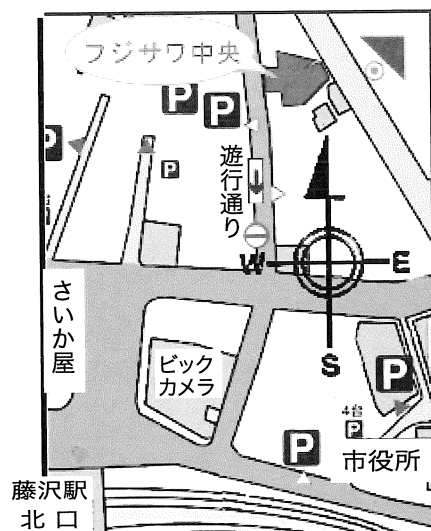
日時 10月18日(土) 午後6時～9時

会場 藤沢リラホール

■望年会 詳細未定。

…………… キリトリ ……………

フジサワ中央案内図



ナチス・ドイツが行った国家による史上最大の紙幣贋造事件

ベルリン国際映画祭コンペティション部門正式出品

映画「ヒトラーの贋札」ご案内

★ 湘南日独協会会員ご優待 !! ★

解説： 国家による史上最大の贋札（がんさつ）事件と言われる、“ベルリンハルト作戦”を題材にしたヒューマンドラマ。第2次世界大戦中のドイツ、ザクセンハウゼン強制収容所で、ナチスから紙幣贋造（がんぞう）を強制されたユダヤ系技術者たちの苦悩のドラマを描く。監督は『アナトミー』のステファン・ルツォヴィツキー。実際に強制収容所で贋造（がんぞう）に携わった印刷技師アドルフ・ブルガーの著書が原作となっている。驚がくの歴史的事件に秘められた真実の物語が堪能できる。（シネマトゥデイ）
あらすじ： 1936年のドイツ、ベルリン。パスポートや紙幣など、あらゆる偽造を行うプロの贋作（がんさく）師サリー（カール・マルコヴィックス）。犯罪捜査局の捜査官ヘルツォーク（デーヴィット・シュトリート）に捕らえられた彼は、マウトハウゼン強制収容所に送られる。そこは犯罪者の送られる刑務所ではなく、ユダヤ人を対象にした収容所だった。（シネマトゥデイ）



6月14日(土)より3週間フジサワ中央Iで上映

..... キリトリ

ナチス・ドイツが行った国家による史上最大の紙幣贋造事件

映画「ヒトラーの贋札」

湘南日独協会会員ご優待券

1,700円→**900円**

本券を「フジサワ中央I」窓口へ渡してチケットを購入して下さい。上映期間中有効です。
上映期間 6月14日(土)→7月4日(金)
上映時間 18:30～20:10 (1回興行)
フジサワ中央の地図は裏面にあります。

ワイマールを知ろう③

ゲーテとシラー

会員 西沢英男



ゲーテとシラー像

行きたい、あるいは行かなければと思いながら、つい行きそびれているところがままあります。私にとって、ワイマールがそれです。そんな訳で、ワイマールに関してなかなかイメージが湧かないのですが、ふと思い浮かんだのが、ゲーテとシラーのことです。

メイン河畔フランクフルト生まれのゲーテ、ネッカー河畔マルバッハ生まれのシラー、シュトゥルム・ウント・ドラングの時代を経て二人が終生変らぬ親交を続けたところがワイマールです。病弱の後輩シラーに先立たれ、それでも力を振り絞って畢生の大作『ファウスト』を完成させて、「もっと光を」とつぶやき力尽きたのもこの地です。

ゲーテは若きカール・アウグスト公に請われ、実り豊かな時を過ごしたフランクフルトを後にし、ワイマールにやってきました。ここでゲーテは公国の国務大臣として政治に携わり、率先垂範、公国の運営に尽力し成果を上げますが、政務に疲れ、イタリアに旅立ちます。

憧れの南の陽光の下、心身のリフレッシュをして、二年後にワイマールへ戻ってきました。そして、ゲーテにとって天の配剤ともいうべきシラーとの出会いが待っていたのです。シラーは故郷を離れ、マンハイム、ライプツィヒで活躍しながら、ワイマールにやってきました。1794年、ゲーテとの親交が始まり、シラーの死まで11年間、この地で二人は変わることのない友情に結ばれ、ドイツ古典主義を確立したのです。

ワイマールにはゲーテの家もあれば、シラーの家もあります。さらにはアウグスト大公家（ウィーン会議でワイマールはザクセン＝ワイマール大公国に格上げ）の墓でも二人の棺は並んで置かれています。なかんずく市の中心にある国民劇場の前に並び立つ二人の立像は、繰り返しになりますが、終生変らぬ二人の友情を表していると思います。

さしずめ、ワイマールはゲーテ、シラーなしには語れない文化の都ということでしょうか。

蛇足ながら、フランクフルトではシラーはゲーテの背中を見、ウィーンではゲーテとシラーはリンク通りをはさんで向き合っています。ただ、ここのシラーはかなり高い台の上に立っており（ゲーテは座っています）、いつ見てもお定まりの落し物で頭が白くなっていますが、これはまあご愛嬌ですかね。